

松下竜一

ゆい子抄

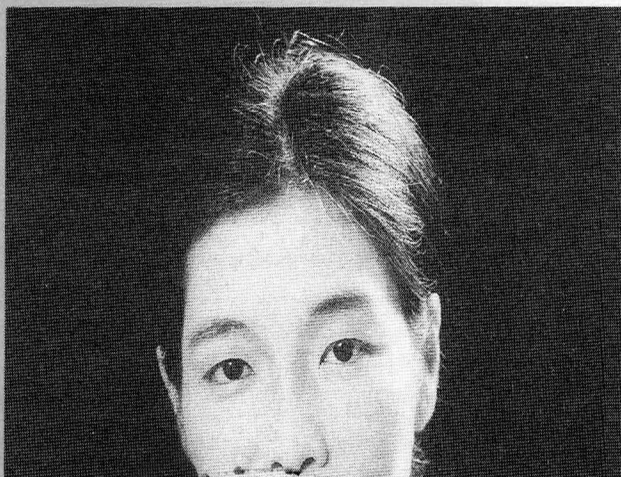
恋と芝居の日々



松下竜一

い子抄

恋と芝居の日々



ゆう子抄——恋と芝居の日々

一九九二年六月二十五日 第一刷発行

著者——松下竜一

© Ryūichi Matsushita 1992.
Printed in Japan

定価——一五〇〇円（本体一四五六円）

装幀——山越通子

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二二 郵便番号 一一二〇―

電話 編集部〇三―五九五―五三三

販売部〇三―五九五―五六三

製作部〇三―五九五―五六五

印刷所——慶昌堂印刷株式会社

製本所——若林製本株式会社

乱丁本・落丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えます。なお、この本についてのお問い合わせは学芸図書第二出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-206000-0（※2）

ゆう子抄——恋と芝居の日々・目次

第一章

出遇い 5

吉四六 13

修羅場 21

パ
パ 29

第二章

告白 39

新潟の冬 50

口笛 61

春の嵐 69

第三章

移転 81

ロウソクの火

マーちゃんへ

私生児 109

99 90

第四章

日記

119

春菜

131

ごてしん

141

解散

150

第五章

檜の丘

163

馬・羊・チャボ

173

百姓見習い

181

第六章

くいちがい

191

砂田明

200

三本の柱

211

第七章

白浪五人男

223

変貌

232

瓦解の予感

242

晴れやかな夜

250

終章

263

後記

268

第一章

出遇い

出遇い

ゆう子が、もうこの地上のどこを探してもいないんだと思うと、彼女はほんとにこの世の人だつたんだろうかと、そんな不思議な気持ちになることがあるんですよ。

ある日ふつとぼくの前に現れて、ぼくが一番苦しいときを助けてくれて、そしてまた突然ふつと消えていったゆう子が、さながら「夕鶴」のつうみtainな気がしましてね。

初めてぼくの前に現れたときのゆう子の印象が焼きついていて、そう思わせるのかも知れないですね。

あのときのゆう子は、こわれやすいガラス細工のように純粹で美しくてはかなげで……とても場違いなところに降り立った印象がありましたものね。

もう、二十年も前のことですけど。

彼女はなんの前ぶれもなく、ふっと現れた。

大分市の郊外にある劇団造形劇場を彼女が訪れた一九七一年六月十三日、劇団主宰の野呂祐吉は前夜からの風邪の熱で病臥びようがしていた。東京からはるばると若い女性が訪ねて来ていることを、団員の徳永貴里子が二階の病床に知らせに来たとき、祐吉の気分はよほど楽になっていた。

「この前のラジオ放送を聴いて、どうしても来てみたかったんだって」

驚いたでしょといったげな貴里子の口調に、仰臥ぎようがしたままの祐吉が素直に反応した。

「へーえ、それはびっくりだなあ。——やはり、ちゃんと聴いてる人はいるんだ」

「あの放送には、野呂さんの情熱がこもってたもの」

造形劇場の団員たちは、祐吉の妻ミツをママと呼ぶのに、祐吉のことは野呂さんと呼んでいる。

「今日はばくは会わないから、君たちに相手はまかせるよ」

久々に病床でゆっくりするつもりの祐吉は、貴里子を去らせてから指を折って日数を数えてみた。NHKラジオのシリーズ番組「ここに生きる」で、祐吉が大分市で芝居と農業に生きる造形劇場の集団生活を語ったのは六月七日だったから、放送からまだ六日しかたっていない。いくら関心を抱いたからといって、なんの問い合わせもなくいきなり東京から大分の地まで訪ねて来た人があることに、祐吉は驚かされていた。

何度かまどろみながら、目覚めるたびに聞こえる階下からの若者たちの笑い声や話し声の中に、祐吉はそれとなく遠来の女性の声を聞き分けようとしていた。

彼女と対面したのは翌朝だった。この日は大分市立三佐みさ小学校での公演なので、祐吉は寝ているわけにはいかない。さいわい、風邪もほとんど抜けていた。

「きのうからお邪魔しています。東京から来た池ゆう子といっています。——お風邪はもうよろしいんですか」

階下の食堂で挨拶されたとき、思いがけなく祐吉の胸中には羞恥しゆうちの感情が走った。

「野呂です。むさくるしいところで、びっくりしたでしょ」

慌ててそんな言葉を口走ったのも、彼女のあまりに繊細な印象に胸を衝つかれたからだろう。こわれやすいガラス細工を見るような清らかな印象が、病み上がりの祐吉にはひどくまぶしく映った。

「ちようどよかった。今日の公演を観てください。——今日が五百九十二回目の公演なんですよ」

祐吉の勧めに、彼女は「そうさせてもらいます」と答えた。

「この前ラジオで初めて知ったばかりなのに、もうほんとに観られるなんて、うそみたいですよ」

それがくせなのか、彼女は首を少し左に傾けるようにして伏し目がちにものをいう。いきなり東京から訪ねて来たというので、陽性で行動的な女性を想像していた祐吉には、そのはにかんだ

ような声の低さも意外だった。

せっかく遠来の客を誘った造形劇場五百九十二回目の公演だったが、めったにないような失敗に終わったのは皮肉だった。それも舞台がまずかったのではなく、激しい雨のせいだった。

別府湾に近い三佐小学校の公演は、体育館が改築中なので近くの昭和電工の体育館を借りて行なわれたのだが、おりからの雷鳴と激しく屋根を打つ雨音に、舞台のせりふがかき消されてしまったのだ。

五百四十四人の児童にいい芝居を観せられなかったくやしさに加えて、遠来の彼女に失敗の舞台を観せてしまった無念さのままに、祐吉はその日の劇団営業日誌に「やり直したい」と痛恨の言葉を書き込まずにはいられなかった。

「次の学校公演が十八日なんですよ。それまでこちらにいられませんか」
彼女にひどくこだわっている自分を、祐吉は意識していた。

「いたいですけど、十七日には必ず帰ると兄に約束してるものですから」

新潟市出身の彼女は東京の吉祥寺に兄と二人で下宿し、早稲田大学文学部に在籍していたが、いまは中退して日仏学院に通っているという。今度出て来るのにも兄から強く反対され、十七日の帰着を固く約束してやっと許されたという事情なのだった。

造形劇場は農繁期を迎えていた。十五日、十六日は梅雨空を気遣いながら、劇団員総出の麦刈りと脱穀作業に追われたが、彼女も麦を束ねたり運んだり、生まれて初めてという農作業に加わ

った。

「ぼくは根っからの百姓の育ちですからね、百姓仕事が愉しいんですよ。いずれは劇団として自給自足の暮らしが理想なんです。百姓と芝居は必ず両立します。ぼくの演じる吉四六きちよむというのは百姓そのものですからね、百姓でなきゃ演じられないんですよ」

重く垂れこめた曇天どんてんの下、畦あぜに座って、祐吉は無性におのが夢を若い彼女に語りかけたかった。彼のそんな夢や理想を素直に受けとめてくれそうな知性の輝きといったものを、彼女に見ていた。

「こうして草に座ったり、麦のかおりを吸いこんでると、とっても気持ちが落ち着くようですわ。なんだかずっと、こんな気持ちを忘れてみたい。——東京では疲れてしまって、死にたいと思つたこともあるんですよ」

彼女は寂しい微笑を浮かべて、思いがけない呟つぶやきを洩もらした。北国の人の特徴なのか、その肌がひどく白い。

「死にたいと一度も思つたことのない青春なんて、つまりませんよ」

「でも、わたしってほんとにだめなんです。生きる目標を見つけられなくて、大学もやめてしまつたし……それに足も治りそうになくて……」

「足が悪いんですか？」

祐吉は不審な顔をした。別に彼女の歩行が不自然とも見えなかった。

「ええ。両足の膝が痛んで、よく踏んばれないんです。お医者にもよくわからなくて、精神的な

ものだっていわれるんですけど、ほんとに痛むんですよ。いろいろ治療してみても治らなくて……」

彼女の嘆きの言葉をさえぎるように、祐吉は思いきって切り出していった。

「いっそのこと、東京を捨ててこちらに来ませんか。ぼくがあなたを必ず元気にしてみせますよ」

唐突すぎる祐吉のいかただった、彼女は素直に受けとめたようだった。

「ええ、ここでならほんとに元氣になれるそうですわ——兄や両親はきつと反対するでしょうけど……」

期待していなかった返事だけに、祐吉の胸は高鳴った。彼女を前にしていると、四十二歳の祐吉が彼女の若さに染められるように言葉が弾^{はじ}んだ。

彼女は六月十七日午前九時二十七分のバスで鶴崎駅へと向かったが、「必ず来てください。待っています」という祐吉に、「ええ、必ず来ます」という答えを残した。

しかし日がつにつれ、祐吉には彼女が再び現れることなどありえないような気がしていた。

東京での連絡先も残さずに消えた人が、幻^{まぼろし}のように思われたのだ。

およそ一年後に池ゆう子は野呂祐吉への手紙の中で、なぜ衝動的なまでに造形劇場を訪ねて大分市まで行ったのかを、明かしている。へ東京での生活で、人間は結局一人で生きるしかないのだから、誰と話しても、友情関係を結ぼうとしても、空しいのではないかと、人間を信頼するこ

とができず、自分の殻^{から}にしつかりとじこもってはみたものの、やはりそれではあまりにも寂しくて、本当に信頼し合い、力を合わせて生きていこうとする仲間、人間集団の中で生活する中で、この問題を解決したいと思い続けていたとき、偶然にもNHKのラジオ放送を聴いたのだ。野呂祐吉が語る造形劇場という農業と演劇の小集団の存在は、そのときのゆう子にはまさに一つの啓示であった。

一九四八年十一月十五日生まれのゆう子は、大分市大字^{しもとくまる}下徳丸の造形劇場を初めて訪れたとき、満二十二歳であったことになる。

ゆう子は、鉄道工事の監督を務めて出張がちの技術者の父と、留守宅を守る母と、一人の兄と一人の弟にはさまれて、裕福とはいえぬまでも特に不足もない落ち着いた家庭に育っている。そんな家庭の雰囲気は、次のような彼女の中学同窓生の回想記の中のわずかなエピソードからもうかがうことができる。

へ中学三年間は共に器楽クラブに属し、ゆう子さんの兄さん、そして弟さんとも一緒に、楽しく充実した中、諏佐先生のご指導のもと、毎年県代表を争う実力もあるクラブでした。

同じ学年の仲間は特に仲良しで、海で泳ぎ、ゆう子さんのお宅で風呂に入り、ご兄弟とも庭でゲームし、部屋で音楽を聴き楽しんだ一日もありました。あの頃はまだゆう子さんも膝を傷める前で、山歩きもでき、クラブの先生の故郷の山、守門岳^{すもんだけ}のふもとでキャンプもしました。

新潟中央高校ではスキー部に入ったが、途中から膝の痛みを訴えて活動ができなくなる。その

こともあつて、いつそう内向的な性格を深めたようだが、静かな控え目な外見の内に負けぬ気の強さを秘めていて、常に優等生だったというのが、同級生たちがゆう子に対して抱いた印象である。

ゆう子が女子高校を卒業して早稲田大学文学部に入学したのは一九六七年四月だが、それは学園の激動期と重なっている。大学の民主化、そしてベトナム反戦などの政治課題を掲げて、全国的に学園闘争が昂揚し、やがて全共闘の時代と呼ばれる熱い季節に向かつてなだれこもうとする時期に、ゆう子はその活動拠点の一つともなったキャンパスに身を置いたのだ。

だが、ゆう子は大学闘争に積極的にかかわってはいけなかった。そういう感性が薄かったとは思えないのは、次のような文章からうかがえるだろう。彼女が高校一年のときの日記である。

へいま、私の心の中にはいろんな不満、失望感、その他がうずまいている。

ベトナムの戦争、政治、人間というものの、進学、中央高校、どれをとつても一人じゃどうにもできない。が、やはり重要なことだ。それらを考えると、いたたまれなくなることさえある。なんとか解決の糸口を見つけ出そうと思うのだがうまくいかない。

中央高校。あこがれて入ってくる人もいるという学校。ところがどうだ。実際はどうだ。

あーあ、いやだいやだ。先生なんて何を考へてるのだろう。一昔前の「名門」という名にとられ、殻にとじこもろうとする。表向きは自由、自由という言葉に取り囲まれているようだが、かんじんなところや、重要なところにくると、まるつきり古いんだ。

なぜか大学時代の文章を一片も残していない彼女だが、この十六歳の日の文章を延長していけ

ば、大学闘争の主張と交錯しないはずはない。しかし彼女は、外に向けての闘争よりも自分をぎりぎりで見つめることで息苦しい袋小路に入ってしまったのだたろう。闘いのスクラムに飛び込めぬ自分を責め、大学をも一年半でやめ、どう生きればいいのかを求めて一人でもがき苦しんだのだ。

理想へ向けて、至らぬ自己を責めてやまないのは彼女の著しい性向なのだが、死にたいとまで思い詰めて大和路をさまよったのは、造形劇場を訪ねるわずか三ヵ月前のことだった。

袋小路に追い詰められ、悲鳴をあげているときに、彼女は野呂祐吉の語る「別の生き方」と出遇ったのだ。

吉四六 きうちよむ

学園闘争に荒れる早稲田大学を中退して、これからどう生きればいいのかを求めて一人であえていた女性を、大分の地まで引き寄せたラジオ放送とはどんな内容だったのだろうか。

一九七一年六月七日にNHKラジオで放送されたドキュメント番組「ここに生きる——く鉄とス
ポットライト」(四十五分)から抄出して、若干の解説と共に再現しておこう。

アナウンサー（野呂の舞台挨拶の声を背景に）「野呂祐吉、その妻中村ミツ。大分市の農民劇団造形劇場のリーダーである。

彼らには三人の子供と、五人の寝起きを共にする若い劇団員がいる。劇団は、大分県に伝わる民話をもとにした芝居『吉四六さん』を県内で上演中で、その主人公吉四六と嫁のおへまを演じているのが、この二人である」

アナウンサー（演出中の野呂の声を背景に）「野呂祐吉、本名は中村益夫。四十二歳。身長百六十二センチ、体重五十三キロ。

小柄でやさしい眼をしているが、一日中めまぐるしく動き回る。そして、彼の頭からは芝居のことが片時も離れることはない。

野呂さんは昭和四年（一九二九）、大分の近郊に生まれた。父親は商売をしていたが、彼は若い頃芸術に強い関心を抱くようになった」

野呂祐吉「本はよく読んだんですけど、実際には自分の家族の中で、特におやじとわたしの間に、あんまり親子としての対話がないわけですね。これが非常に寂しい気がしていた。

で、当時非常に軍国主義の盛んな頃で、おやじからまあ逃れるように、少年飛行兵に行ったわけですね。でも、一年半の軍隊生活で終戦で帰って来た。

で、またもんと暮らしてうちに、大分放送芸能集団という劇団ができて、それが八木隆一郎の『湖の娘』という作品で鶴崎公演をやって、それを見たのが新劇系統の芝居を観た最初で、これに非常に感動を受けました。